

受講番号 19005 学校名 安芸桜ヶ丘高等学校 氏名 児嶋 明敏

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 2年生 生徒数 13名
 科目名 英語 I 単位数(授業時数) 2 時間 使用教科書名 VISTA English Series I (三省堂)

クラスの様子・特徴

生徒の学習到達度は標準的な生徒もいれば、中学生のレベルの生徒もいる。到達度に格段の差があり、授業を円滑に進める上で常に苦労をする点である。英語の授業時数は工業科(対象クラス)が基本的に1週2時間、商業科は1週3時間である。

問題の確定

1・2年次の分割履修の英語 I はほとんどが中学校の復習であるけれど、基礎的な事項の定着がなかなかできない。

予備調査

A 授業の観察

生徒にとって英語の授業は「分からない」「嫌い」な授業であり、その理由は①基礎・基本が身につけていない、②学習内容が定着しない、③苦手意識を強く持っている。その結果、気を緩めるとすぐに私語を始め、集中力を失う。悪循環の連鎖である。

B 生徒による授業評価

アンケート調査を行った結果、中学時に英語学習は「嫌い」で、高校入学後も「嫌い」であるが、現在の授業の「進み具合はちょうど好い」。「書くこと」は苦手で、「話すこと」に興味がある。また、ALTの先生の話は「だいたい理解できた」となった。

C 学力データ

1学期中間考査 平均点:61点 最高点:97点 最低点:29点 1学期末考査 平均点:51点 最高点:97点 最低点:7点 5段階評定 5:2人 4:4人 3:1人 2:3人 1:3人 既に2年生特有の中だるみが始まっている。

リサーチ・クエスト

基本的な語彙の習得・定着、英文の文構造の理解・習得、そして英語学習に対する苦手意識の解消をはかりたい。「分からない」「嫌い」な授業から「分かる」「好き」な授業にしたい。

仮説・実践・検証

仮説1

中学校で既習の語句を含め、高校で学ぶ語句について、発音・意味・基本的な語法を身に付けることができれば英語学習がスムーズに進むのではないかと。

実践1

各レッスンの新出語句に加えて、既習の語句についても補足的に学習をはかり、特に日常的に使用頻度の高い語句には細心を払った。また、意味についてはできるだけ文脈を通して理解するように指導した。綴り字と発音を丁寧に練習し、発音は口頭で指導しても困難な場合は、良いやり方とは思えないが、カタカナで板書した。必要に応じて発音記号を指導を行った。語法は基本的な項目に限定し指導した。

検証1

Lesson 10の単語テスト 発音については一定の成果が見られた。不正確な読み方をしていた頃と比べるとカタカナの発音ではあるが一歩前進の思いがある。意味についてはあまり成果があったとは言えない。Lesson 11の単語テスト 正確度は発音も意味も前回より良くなった。「アンケート(2)」では約60%の生徒が語句の発音を覚えられたと答え、約40%の生徒が意味を覚えられなかったと答えている。

仮説2

基本的な文構造を習得することで4技能の基盤を作ることができるのではないかと。

実践2

理屈だけに終わらないように心がけ、説明は簡潔で実用的なものになるよう心がけ、文法のための文法とならないように注意した。説明に必要な文法の語句は簡単なものとし、大きい構成要素から小さい構成要素へと指導を試みた。主語と述語 → 述語の構成(動詞とその他の要素) → 修飾語と被修飾語 各レッスンで扱うポイントについてもできるだけ簡潔な説明を心がけ、上で述べた基本構造を関連付けて指導した。

検証2

この種の学習は生徒には難しいのだろうか。全く効果が上がらなかった。諦めないで3学期も引き続き実施していきたいと思っている。改善すべきこととして、品詞を理解する指導が足らなかった。だから、主語も動詞も区別できないのではないかと。語句の学習のとき品詞についても学習しているが、文構造に結びついていない。文構造が意味を理解するために重要であり、意味のまとまりを正確に把握することの大切さを今後指導していく。

仮説3

基本的な表現の反復練習・暗唱を繰り返すことによって、定着をはかることができるのではないかと。

実践3

1週間に2時間の授業では学習事項の定着をはかるには困難である。家庭学習を促したいが、本校が実施している生徒の生活実態調査では家庭学習を全くしていない生徒は73.7%達している状況からはあまり期待できない。授業中に反復練習を繰り返し、必ずチェックをし、到達度を明示していくことが必要であると思われる。

検証3

散在していた個人成績が全体としてまとまりのある方向に進み、同時に上向きに伸びているように思われる。1学期全体の平均点 56点 → 2学期全体の平均点 70点 2学期の定期考査の少し良い結果を、ARの効果と短絡することはできないが、少なくとも「2年生」「2学期」の所謂中だるみは克服したように思われる。一英語教員としては「めでたし、めでたし」である。

研究の成果

AR「仮説→実践→検証」の過程のなかで、検証の部分が難しかった。実践をし、すぐに何らかの点検を行えば、それなりの数値が出る。テストがある(定期考査がある)ということが事前に分かっていたらなおさらである。一方、長期の時間をおいて既習の事項について生徒に確認をすると曖昧な返答である。その意味において、「基本的な語彙の習得・定着、英文の文構造の理解・習得、そして英語学習に対する苦手意識の解消」をはかり、「分からない」「嫌い」な授業から「分かる」「おもしろい」授業にするというテーマを検証するにはまだ時間が必要である。しかし、今回目指したものに誤りはないと確信している。ARは必然的に繰り返し継続することが求められる。引き続き実践し成果を得られるようにしたい。

今後の授業改善の課題

本稿レポートを作成しながら感じることは今ちょうど入り口の門前に立ったような気分である。仮説、実践に誤りはなかったと思われる。特に、仮説1・2、実践1・2に誤りはないと確信している。ただし、実践2はまだ工夫の余地がある。今後さらに工夫を凝らしたい。仮説・実践3の「定着」をはかるについては相当の工夫が必要である。本校に入学する生徒の英語力は年々低下している。基礎・基本の習得・定着がますます要求される。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

0887-35-2020

電子メール